

看護実践研究センター報告書

平成26年度

目 次

I はじめに	127
II 平成26年度事業報告	
1. なごや看護生涯学習セミナー	127
(1)看護研究いろはの「い」	
(2)看護研究いろはの「ろ」	
(3)看護研究いろはの「は」	
(4)敗血症性ショックとARDS ―病態理解から治療戦略まで―	
(5)患者急変対応「何か変、と思ったとき…」	
(6)チーム医療の質と患者安全を向上させるノンテクニカルスキル	
2. なごや看護生涯学習公開講演会	132
3. 地域連携セミナー	133
4. 看護研究サポート	134
III 今後の課題	135

名古屋市立大学看護学部
名古屋市立大学病院看護部

平成26年度看護実践研究センター運営委員会

センター長：明石 恵子（名古屋市立大学看護学部）

運営委員：市川 誠一（名古屋市立大学看護学部）

安東由佳子（名古屋市立大学看護学部）

金子さゆり（名古屋市立大学看護学部）

湊田英津子（名古屋市立大学看護学部）

山田 礼子（名古屋市立大学病院看護部）

内山 綾子（名古屋市立大学病院看護部）

事務職員：松原 裕子

名古屋市立大学看護学部看護実践研究センター

〒467-8601

名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄 1 番地

TEL & FAX：0 5 2（8 5 3）8 0 4 2

<http://www.nagoya-cu.ac.jp/nurse/center/>

I はじめに

平成26年10月28日、名古屋市立大学は、基本理念や行動指針となる『名古屋市立大学憲章』を制定した。同時に、時代の変化に的確に対応し、本学の強みを活かしながら、本学の15年後の明るい未来を築いていくために『名市大未来プラン』を策定した。これらのいずれにも社会貢献の推進が謳われており、社会貢献活動は、大学の大きな使命である。

名古屋市立大学看護学部における社会貢献活動は、看護実践研究センター（以下、本センター）を中心として行われている。本センターの目的は、看護を通じた地域貢献の推進であり、大学院看護部と協働して、地域や臨床現場の課題に即した事業を企画・運営している。具体的な事業は、市民や保健医療福祉関連職種を対象とした講演会やセミナー、研究サポートなどであり、これらは定着しつつある。

本報告書では、看護学部教員および大学院看護師の協力を得て実施した本年度の社会貢献事業の実績と今後の課題を報告する。

II 平成26年度事業報告

1. なごや看護生涯学習セミナー

担当：澁田英津子、内山綾子

「なごや看護生涯学習セミナー」は、愛知県内の保健医療職者の専門性を高める機会を提供することで、地域住民・名古屋市民へのサービス向上につながることを期待した事業である。本年度は、看護研究セミナー3件、看護実践セミナー3件を開催した。

1) 事業実施の経緯

時期	内 容
5月	テーマおよびセミナー担当者の募集
6月	セミナー担当者との内容の決定、セミナー日程の調整 受講料、チラシ、受講カード、受講証明書、アンケートの検討 広報なごや8月号への掲載依頼

時期	内 容
7月	名古屋市内の病院、介護老人保健施設、愛知県内の保健所など142箇所へチラシを発送 受講カードの発送方法を検討（メールとFAX） 受講証明書の発行方法の検討（申し込み時に希望の有無を確認）
8月	参加受付対応（患者急変対応は希望者が多く抽

時期	内 容
8月	選を実施) 受講カードの発送（メール、FAX） セミナー実施前に受講者リスト作成、講師に連絡、領収書発行手続きを事務に依頼、配布資料とアンケートの印刷を実施 セミナー終了後は、アンケートを集計し随時報告
9月	看護研究いろはの「い」実施（9/5、9/19）、アンケート集計
10月	看護研究いろはの「ろ」実施（10/18）、アンケート集計 看護研究いろはの「は」実施（10/18）、アンケート集計 敗血症性ショックとARDS－病態理解から治療戦略まで－実施（10/3、10/17、10/31）、アンケート集計
11月	患者急変対応「何か変、と思ったとき・・・」実施（11/15）、アンケート集計
12月	チーム医療の質と患者安全を向上させるノンテクニカルスキル実施（12/20）、アンケート集計

2) 事業の実施状況

【看護研究セミナー】

(1) 看護研究いろはの「い」

講 師：山田紀代美(名古屋市立大学看護学部・教授)

日 時：平成26年9月5日・9月19日(金)、

18:30～20:30

場 所：名古屋市立大学看護学部410講義室

募集人数：30名

参加者：9月5日(金) 24名、9月19日(金) 17名

参加費：2,000円

〈内 容〉

昨年同様に、今年も「文献」を取り上げ、2時間の講義を2回実施した。昨年度からの変更点は、文献検討を通して今後の研究テーマに発展するように意図したこと、実施日を一週間明けたことである。すなわち、一回目で学んだ文献の読み方を自分自身で行い、二回目にそれを講師と共に検討し自分の力にするためである。

第一回目の講義では、「文献の探し方と読み方」を主に行った。始めに、研究の実施あるいは論文の構造における文献の位置づけを概観した。続いて、各種の文献データベースを紹介するとともに検索された文献の中から選択する基準を明示した。また、文献入手のリソースも紹介した。読み方については、論文を吟味し研究の長所や限界等を理解する方法である「critique(クリティーク)」を説明した。最後に、次週の検討に用いる論文を配布して終了した。

二回目は、文献検討の視点を記載した資料を開始時に配付し、参加者の考えやグループワークの結果を記載する等の作業を交えて講義を進めた。分析の視点は、取り上げたテーマの臨床における重要性、使用している概念及びその類似概念との違い等を中心に検討を深めた。研究方法では、使用している尺度の妥当性、「看護師の成長」を捉えるための研究デザインについて、さらに統計解析結果の読み取り方法、最後に本研究の課題等について自身の意見を述べて終了した。

受講者の感想は、実践的な内容で今後の研究を考えていく上で参考になった、テーマを決めるまでに何をしなければいけないかが分かったなど、肯定的な意見が多かった。一方で、二回目の出席者が7割程度に減少したことは、講義内容と受講者の意図のずれあるいは講義内容を難解と感じた結果かもしれない。

本セミナーを実施して思うことは、看護師の方々の研究への熱意である。仕事終了後にさらに学ぼうとするその姿勢にはこちらが大いに刺激を受けた。その熱意に答えるために、私自身が難しい内容をできるだけわかりやすく教授できるよう、文献の選択方法に始まり教授方法等について、今後も思索していきたいと思う。

〈アンケート結果と課題〉

二回目の参加者17名全員から回答があった（回収率100%）。参加者の概要は「看護師」が15名（88.2%）、「30歳代」6名（35.3%）であり、セミナー参加の動機は「自分の看護のレベル・アップ」8名（47.1%）であった。セミナーの内容・講師の教え方は「よかった」「どちらかといえばよかった」16名（94.1%）であり、「実践的な内容だったので、今後の研究を考えていく上でとても参考になった」「分かりやすかったが、文献を実際に検討するのが難しかった」などの意見からも好評であることが示された。

一方、セミナーの日程が「適切であった」「どちらかといえば適切であった」10名（58.8%）であり、「時間を短くしてほしい」「土日などの集中型の方が出席しやすい」などの意見から開催日時の検討が課題である。また、設定された受講料について「適していると思う」11名（64.7%）、「安いと思う」4名（23.5%）であり受講料の検討も課題である。

(2) 看護研究いろはの「ろ」

講師：市川誠一（名古屋市立大学看護学部・教授）
日時：平成26年10月18日（土）、9:30～12:30
場所：名古屋市立大学看護学部情報処理室
募集人数：20名
参加者：20名
参加費：1,500円

〈内容〉

今年は「看護研究いろはの『は』」が開講され、SPSSを用いた統計分析を中心とした講習が行われることとなった。これまでの「看護研究いろはの『ろ』」で不十分だったところが補われることとなったので、量的研究を行うにあたって基本となる内容として、①基本的な統計量の考え方、②調査を実施するプロセスとした。

①基本的な統計量の考え方（パワーポイント資料による講義）

(i)標本サンプリングが研究結果に及ぼす影響

量的調査を行うにあたって、調査集団のとりえ方、調査対象者の選定、調査対象者数、回収率の意味、回収率に及ぼす要因、調査を実施するにあたっての留意点、などを説明した。

(ii)基本統計量

数量データの取り扱いとして、平均値、標準偏差、中央値、最頻値、度数分布、正規分布、棄却限界法、「ばらつき」が発生する原因などについて、例を用いて説明した。また、名義尺度、順序尺度、間隔尺度、比率尺度を解説した。

②調査を実施するプロセス（エクセルを用いた事例データによる演習）

この時間では、質問紙調査を想定し、その手順にあわせて、対象集団にアクセスする方法、対象者の参加率の予測、調査項目の作成、分析・解析方法の検討、依頼状の作成、パイロット調査などを取り上げて説明した。次いで、調査実施、データ収集、分析のプロセスについて、特に調査票の回収とデータ・クリーニング、データ・コーディング（コーディングマニュアルの作成）、データのダブルエントリーと入力ミスを見出す方法について、あらかじめ用意したエクセル・データを用いて演習した。

以上の講義と演習は、次のSPSSを用いた集計・分析の準備として位置付けて行った。データ・コーディングやエクセルへの入力方法の実際は質問紙調査を計画している受講生やこれから分析を実施する受講生から今後の研究に生かせるという意見があげられた。

〈アンケート結果と課題〉

参加者20名のうち、18名から回答があった（回収率90.0%）。参加者の概要は「看護師」が15名（83.3%）、「30歳代」6名（33.3%）であり、セミナー参加の動機は「自分の看護のレベル・アップ」「新しい知識を得る」が各6名（33.3%）であった。セミナーの内容・講師の教え方は「よかった」「どちらかといえばよかった」18名（100%）であり、「説明や例えがとても分かりやすい講義だった」「研究に早速、役立つ内容と思った」「資料が分かりやすかった」などの意見から大変好評であるこ

とが示された。

一方、セミナーの日程は「適切であった」「どちらかといえば適切であった」17名(94.4%)であった。「時間を短くして欲しい。平日夜2回というのも良いと思う」の意見から開催日時の検討が課題である。また、設定された受講料について「適していると思う」10名(55.6%)、「安いと思う」7名(38.9%)であり講義・演習内容に適した受講料の検討も課題である。

(3) 看護研究いろはの「は」

講師：金子典代

(名古屋市立大学看護学部・准教授)

日時：平成26年10月18日(土)、13:30~16:30

場所：名古屋市立大学看護学部情報処理室

募集人数：20名

参加費：1,500円

参加者：14名

〈内容〉

本セミナーでは、実際にSPSSのソフトウェアを使用し、模擬データを用いたデータ分析を実際に体験してもらえるように工夫した。基礎統計、単純集計、2項目の質的変数間の関係を見る分析、量的変数間の関係を見る分析に関する講義も行った。

同日開催の「看護研究いろはの『ろ』」の続編となるような内容とした。対象者のデータ分析経験は様々であることが考えられたため、色々なレベルに対応できるように内容を工夫した。基本的なデータの種類や取り扱いの説明から入り、データの入力、分析用のソフトであるSPSSの活用、分析結果の読み取り、データ分析の応用編までの大まかなイメージができるように工夫した。実際の質問紙調査の実施、データ入力のシミュレーションができるようにデータセットを準備し、対象者全員に事前に配布した。回答者の質問紙からのエクセルへのデータ入力、データの正確性の確認、SPSSへのデータの移動、SPSSソフトウェアを使用してできる量的データの分析手法の説明、SPSSを使用することで簡便にデータ分析ができることの説明を行った。事前に準備した模擬データを用いて、SPSSにより基礎統計量の算出、平均値の算出、群別の平均値の算出などを行った。またカイ二乗検定、t検定などの説明も行い、SPSSソフトウェアを使用する際にはどの数値を参考にすべきか、注意点も説明を行った。各自のコンピューターソフトウェアへの習熟度を見ながら個別対応しつつ行った。データの分析手法は多くあり、ソフトウェアにより簡便に実施できるようになってきているが、研究のデザイン、得るデータにより用いる分析手法がまったく異なるため、研究計画の洗練に時間をかける必要があることについても解説

した。後半は、より踏み込んだ知識の習得を目指している受講者がいることも鑑み、単変量解析のみならず多変量解析についても解説した。

〈アンケート結果と課題〉

参加者14名のうち、13名から回答があった(回収率92.9%)。参加者の概要は「看護師」が10名(76.9%)、「30歳代」5名(38.5%)であり、セミナー参加の動機は「新しい知識を得る」4名(30.8%)であった。セミナーの内容・講師の教え方は「よかった」「どちらかといえばよかった」13名(100%)であり、「実際にパソコンに触れてよかった」「全てを理解することはできなかったが、方法があることや、だいたいの流れなどは知ることができてよかった」「分かりやすい説明だった」などの意見からも好評であることが示された。

一方、セミナーの日程が「適切であった」「どちらかといえば適切であった」10名(76.9%)であり、「2日間に分けてもらえるとよかった。午前、午後とも聞こうと思うとちょっと大変だった」の意見から開催日時の検討が課題である。また、設定された受講料について「適していると思う」は5名(38.5%)、「安いと思う」6名(46.2%)であり演習を含めたセミナーの受講料の検討も課題である。

【看護実践セミナー】

(1) 敗血症性ショックとARDS

—病態理解から治療戦略まで—

講師：薊 隆文(名古屋市立大学看護学部・教授)

日時：平成26年10月3日・10月17日・10月31日(金)、

18:30~20:30

場所：名古屋市立大学看護学部 410講義室

募集人数：20名

参加費：3,000円

参加者：10月3日(金) 8名、10月17日(金) 9名、
10月31日(金) 10名

〈内容〉

①敗血症とは？ 免疫・炎症・凝固の視点から

敗血症は、ARDS、DICなどを引き起こし、ショックに陥れば、腎不全、肝機能障害も伴う多臓器不全へとつながるが、その原因は多岐にわたり、病態も複雑である。この回では、敗血症が感染によるSIRS(全身性炎症反応症候群)であること、SIRSは炎症から引き起こされること、そして、炎症が、免疫反応、凝固反応とともに生体への様々な侵襲から引き起こされることを概説した。

②ショックの病態と呼吸不全の病態

敗血症の第一の病態は、敗血症性ショックである。



この回では、ショックとは、組織酸素代謝の障害で、組織の酸素需要に対して酸素の運搬（供給）が不足していることであることを示した。敗血症性ショックが、他の原因によるショックとどのように異なるのかを比較した。次に、敗血症から引き起こされるARDSの病態については、心不全による酸素化障害との違いを示し、また、酸素化障害の4つのメカニズムについて概説した。

③敗血症性ショックの治療とARDSの治療の考え方

前2回の病態の理解を踏まえたうえで、ショックと呼吸不全の治療戦略について述べた。ショックでは、酸素の運搬を改善・維持するためには、戦略として、肺での酸素化能・心臓の運搬能・そして酸素の担体としてのHbの3つが重要であることを説明した。ARDSの呼吸管理では、肺保護戦略と呼ばれる、1回換気量を少なくし、過度の圧を避け、一方では、高いPEEPを利用して肺胞を開き続けることの重要性を説いた。肺保護戦略を踏襲する具体的な人工呼吸もモードとして、なるべく自発呼吸に近い、APRVやBIPAPの有用性を示した。

〈アンケート結果と課題〉

3回目の参加者10名全員から回答があった（回収率100%）。参加者の概要は「看護師」が10名（100%）、「20歳代」5名（50.0%）であり、セミナー参加の動機は「自分の看護のレベル・アップ」8名（80.0%）であった。セミナーの内容・講師の教え方は「よかった」「どちらかといえばよかった」10名（100%）であり、「説明が多くあって、とても勉強になった」「1人で勉強をして学ぶには、難しいテーマだったので、このような学ぶ機会があって良かった」などの意見からも好評であることが示された。

一方、セミナーの日程が「適切であった」「どちらかといえば適切であった」9名（90.0%）であり、「仕事の勤務調整のことを考えると1日にまとめていただいた方が、参加しやすい」という意見があげられ開催日時の

検討が課題である。また、設定された受講料について「適していると思う」は4名（40.0%）、「安いと思う」6名（60.0%）であり受講料の検討も課題である。

(2) 患者急変対応「何か変、と思ったとき…」

講師：清水真名美

（名古屋市立大学病院・救急看護認定看護師）

加藤 紀子（同・救急看護認定看護師）

石井 房世（同・集中ケア認定看護師）

寺澤 涼子（同・小児救急看護認定看護師）

日時：平成26年11月15日（土）、9:30～16:30

場所：名古屋市立大学看護学部 病院西棟

講義室A、演習室A・E・F・G

募集人数：20名

参加費：3,000円

参加者：17名

〈内容〉

このセミナーは患者急変に気づき、医師などに報告することができることを目的とした。患者急変対応コース for Nurses ガイドブックによれば「急変とは、予測を超えた状態の変化をいい、その程度は観察者の予測範囲によって異なる。一般にはその変化の方向性は、病態（症状）の悪化を意味し、何らかの医療処置を必要とする場合を表現している」と定義されている。私たち看護師が急変を見逃さないようにするためには患者の病態変化に気づき、急変対応の必要性を判断する。そして、医師などに迅速かつ適切に報告する能力が必要となる。

しかし、急変はいつ起こるか分からないため、常日頃から急変に備えて観察する能力が必要となる。そのために患者と接する時にはいつも第一印象の観察を心がけることが必要となる。第一印象とは「最初に出会った数秒間で、外見全体を視覚と聴覚を使って、アセスメントする」ことである。そこで必要なことはアセスメントの結果、「死に結びつく可能性のある危険な兆候」があるのかどうかを判断することである。その結果、心肺停止状



態と判断した場合は、BLSを実施する。心肺停止状態になっていないが、危険な兆候があると判断した場合、ナースコールで応援要請を行いながら、さらに詳しく患者の状態を把握するために一次評価を行っていく。一次評価では簡単な器具（血圧計・モニタ・SpO₂）と触診・聴診で、命を支える「A：気道」「B：呼吸」「C：循環」「D：意識」「E：外表」に問題がないか素早く観察を行う。すなわち、心停止にどの程度近づいているかを判断するために「A・B・C・D・E」の視点で評価するのである。

そして、患者の状態を観察しながら、患者に何が起きているのかアセスメントを行い、SBARを用いた報告を医師などに行う。

これらの方法を知り、実践できるようになるために、まず観察のポイントや観察方法を講義で知った後、机上シミュレーションを行って、講義で聞いた内容の理解を深めてもらった。そして、人形を使用し、実際に行動して、学んだ内容を実践してもらうという段階を経て学習するセミナーとした。

〈アンケート結果と課題〉

参加者17名全員から回答があった（回収率100%）。参加者の概要は「看護師」が17名（100%）、「20歳代」11名（64.7%）であり、セミナー参加の動機は「自分の看護のレベル・アップ」17名（100%）であった。セミナーの内容・講師の教え方は「よかった」「どちらかといえばよかった」17名（100%）であり、「シミュレーションを行う事で、何度も体験でき意識付けがしやすくなった」「急変対応のことだけでなく、急変前の観察の必要性もわかってよかった」「根拠を付けて、丁寧に指導してただけ、とても理解できた」などの意見からも大変好評であることが示された。

一方、今回セミナーの希望者が多数あり、受講者を抽選で決定した。そのため、「20名しか受講できず希望が通らなかったスタッフがいる。何回か同じ講義を行っていただきたい」という意見が述べられ、募集人数や開催回数の検討が課題である。また、設定された受講料について「適していると思う」は12名（70.6%）、「安いと思う」5名（29.4%）であり演習を含めたセミナーの受講料の検討も課題である。

(3) チーム医療の質と患者安全を向上させるノンテクニカルスキル

講師：金子さゆり

（名古屋市立大学看護学部・准教授）

日時：平成26年12月20日（土）、9:30～16:30

場所：名古屋市立大学看護学部 402講義室

募集人数：20名

参加費：3,000円

参加者：12名

〈内容〉

近年、医療現場では“ノンテクニカルスキル”を身に付けることによって、臨床を実践するための知識や技能である“テクニカルスキル”を補完し、臨床現場におけるヒューマンエラーの回避やチームパフォーマンスの向上が期待されている。本セミナーでは、チーム医療に必要とされるノンテクニカルスキル（おもにチームワーク、リーダーシップ、状況モニタリング、相互支援、コミュニケーション）について講義だけでなく演習を交えながら理解を深めた。

まず初めに、ノンテクニカルスキルの概要を説明し、DVDをみながら医療安全の推進のためには必要不可欠なスキルであることを実感してもらった。そして、AHRQ（Agency for Healthcare Research and Quality）が開発したTeamSTEPPSを概説し、このフレームワークに沿って、途中ゲームなどを取り入れながら、チームワーク、リーダーシップ、状況モニタリング、相互支援、コミュニケーションの順に進めていった。「チームワーク」では、与えられたタスクに対し条件が制限されるほどリーダーシップ、状況観察、コミュニケーションの重要性が増すことを実体験を通して理解してもらった。また、グループとチームの違い、チームとして機能するために必要な事など、分かっているようで案外誤解している部分についても概説した。「リーダーシップ」では、リーダーとマネージャーの違い、リーダーの責務、リーダーシップの発揮方法（ブリーフィング：ブリーフ・ハドル・デフブリーフ）について概説し、緊急入院の受け入れの場面を想定して各グループでブリーフィングを実演してもらった。

午後からは、また1つゲームを行い、チームワークにはメンタルモデルの共有が重要であることを確認した。そして「状況モニタリング」や「コミュニケーション」では、観察した情報をいかに正しく認知し、理解するこ



とができるか、そして正しく伝達することができるかについて、ヒューマンファクターの観点から具体例を示しながら説明した。さらに、対立を解決するための方法やバックアップ方法など「相互支援」についても概説した。最後に、今回の学びを今後に生かすための方策についてディスカッションを行った。

〈アンケート結果と課題〉

参加者12名のうち、11名から回答があった（回収率91.7%）。参加者の概要は「看護師」が11名（100%）、「30歳代」「20歳代」「40歳代」が各3名（27.3%）であり、セミナー参加の動機は「自分の看護のレベル・アップ」8名（72.7%）であった。セミナーの内容・講師の教え方は「よかった」「どちらかといえばよかった」11名（100%）であり、「自分の職場の状況を考えながら受講できた。すぐに職場で活用できそう」「チームスタッフで集まる時間を作ってみようと思った」などの意見からも好評であることが示された。加えて、セミナーの日程、受講料についても「適切であった」が9割以上であり、課題は特になかった。

2. なごや看護生涯学習公開講演会

担当：金子さゆり、市川誠一、山田礼子

「なごや看護生涯学習公開講演会」は、地域の保健医療職者が求めている知識、情報、話題などを提供し、結果として市民の皆様に提供する医療の質向上に貢献することを目的としている。その時々医療情勢をふまえてテーマを選定し、その分野で活躍中の講師を招聘し、毎年1回開催している。

1) 事業実施の経緯

時期	内 容
4月	4/15に公開講演会の担当者を選出し、テーマの提起を行った。
5月	5/20にテーマと講師の選定を検討し、その後、講師との交渉を進めた。
6月	スケジュールや参加者の募集方法など検討を行った。
7月	7/18に広報なごや10月号への掲載依頼を行った。講師謝金・交通費・会議費・会議会場の申請を行い、公文書発送の手続きを行った。チラシを作成し、7/29にチラシ原稿の最終確認を行い、印刷1200部を発注した。
8月	8/1チラシ納品後に、名古屋市内の病院および介護老人保健施設、愛知県内の保健所などへチラシを発送した。募集告知は看護実践研究センターホームページと全学部ホームページで8/5から開始した。

時期	内 容
8月	応募の受付はFAXとメールにて行い、参加の可否についてFAXとメールにて返信を行った。参加申し込み状況は随時確認した。
9月	9/9に入試広報課へプレスリリースを依頼した。9/16に看板・垂幕の検討、当日役割分担の検討、講師への最終連絡文書の確認を行い、講師への最終案内（資料等の依頼）を発送した。
10月	10/16に名古屋教育医療記者会と名古屋市政記者クラブにプレスリリースした。10/21に参加申し込み状況、当日のスケジュール・役割分担、アンケート、配布資料の最終確認を行った。
11月	事前受付リストを作成、領収書発行の手続きを事務へ依頼、配布資料とアンケートの印刷を行い、講演会当日に向けて準備を整えた。

2) 事業の実施状況

テーマ：これだけは知っておきたい認知症ケア

講師：高梨早苗（独立行政法人国立長寿医療研究センター・老人看護専門看護師）

日時：平成26年11月19日（水）18：00～19：30

場所：名古屋市立大学病院 中央診療棟3階大ホール

参加費：500円

参加者：182名（講演会関係者含む）

〈内 容〉

2025年には団塊の世代が一斉に後期高齢者となり、その数は約2200万人にまで膨らみ、何らかの介護を要する高齢者も700万人に達するといわれ、なかでも認知症をもつ高齢者の増加が予測されている。今回、看護職員の認知症ケアの理解を深めるために、実践の場で活躍されている高梨氏をお迎えし、講演をしていただいた。

セミナーでは、“認知症”疾患の特徴や薬物療法の理解、“認知症”の気持ちの理解などが説明され、さらに、認知症患者とのコミュニケーション方法や論理的問題への対応など具体的な取り組みが紹介された。講演後には



参加者からたくさん質問があり、認知症ケアの重要性が再確認された講演会であった。

3) 参加者アンケート結果

参加者168名のうち、157名から回答があった（回収率93.5%）。参加者のほとんどが看護師（82.2%）であり、病院のみならず介護施設や訪問看護ステーションからの参加がみられた。講演内容が「わかりやすかった」と答えた人は78.3%、「今後の仕事に生かすことができる」と答えた人は95.6%であり、参加者の反応は大変良かった。以下に参加者の感想の一部を掲載する。

- ・認知症状やBPSD（認知症の行動・心理症状）の病態だけでなく、入院中のケアについても事例を通して教えて頂いたので、すんなりと身に入ってきた。噛み砕いていただきとても分かりやすかった。
- ・認知症の方への対応について事例を交えての話であったので、明日からの仕事に活かしていけたら良いと思った。
- ・認知症のある患者さんに会うことが多くなってきたと思っていたところ。接し方や対応の仕方について知識を深めることができ良かった。
- ・もう少しBPSDの事など聞きたかったが、時間も少ない中で、事例も入れながらの講演だったので理解できた。まだまだ深い内容だと思った。
- ・高齢者の家に家庭訪問する等、接する機会がよくあり、その中で認知症による記憶障害か高齢による記憶障害か判別が難しいケースが時折ある。今回の講義を受けて生活にどう影響しているのか、BPSDはどうかををよく考える必要があることが分かった。
- ・病院全体で取り組んでいるテーマ。正しい知識を持ってケアをしていけるようナースの力をつけていきたいと思った。

4) 課 題

本年度の開催時期・時間については特別、問題はみられなかった。来年度は名古屋市立大学開学65周年の記念事業が予定されており、超少子高齢社会への対策に繋がるメインテーマを検討中である。後述する「地域連携セミナー」との関連も考慮して、来年度の公開講演会のテーマは「高齢者」もしくは「退院支援」をキーワードとして検討する。

3. 地域連携セミナー

担当：市川誠一、金子さゆり

「地域連携セミナー」は、保健医療福祉関連職種の方々や市民の皆様と連携して取り組むべき社会的な問題を取

り上げている。さまざまな立場の人々が一緒に考えることで、解決の糸口や新たな方策の発見につながることを期待している事業である。

1) 事業実施の経緯

時期	内 容
4月	3月よりテーマの検討と講師選定を行い、4/15にセミナー開催日時、講師、テーマを決定した。
5月	5/7に広報なごや7月号へ掲載依頼を行った。スケジュールや参加者の募集方法など検討を重ね、講師謝金・交通費の申請を行い、公文書発送の手続きを行った。チラシを作成し、5/23にチラシ原稿の最終確認を行い、印刷1200部を発注した。
6月	6/4チラシ納品後に、名古屋市内の病院および保育所・幼稚園、愛知県内の保健所などへチラシを発送した。募集告知は6/6から看護実践研究センターホームページ、6/10から全学部ホームページで開始し、6/18には名古屋教育医療記者会、名古屋市政記者クラブにプレスリリースを行った。応募の受付はFAXとメールにて行い、参加の可否についてはFAXとメールにて返信を行った。参加申し込み状況を随時確認し、当日のスケジュールと役割分担、アンケート等の最終確認を行った。
7月	事前受付リストを作成、領収書発行の手続きを事務へ依頼、配布資料とアンケートの印刷を行い、講演会当日に向けて準備を整えた。

2) 事業の実施状況

テーマ：地域で見守る子育て支援社会 ～児童虐待をなくすために～

講 師：白石淑江（愛知淑徳大学福祉貢献学部・教授）

日 時：平成26年7月12日(土)、13:00～15:00

場 所：名古屋市立大学 看護学部棟308講義室

参 加 費：500円

参 加 者：63名（セミナー関係者含む）

〈内 容〉

児童虐待は、児童虐待防止法制定から十年が経過したにもかかわらず、悲惨な事件が後を絶たない状況が続いている。虐待は子どもの生命を脅かし、その後の発育発達に深い影を落とす。その犠牲者の半数以上は低年齢児で、発生を予防するためには地域で見守る子育て支援システムが不可欠とされている。今回、健全な児童の育成のための地域社会づくりに尽力されている白石先生をお迎えし、講演をしていただいた。

セミナーでは、児童虐待の背景として、親自身の生育歴や健康状態、孤立や貧困などの社会問題が複雑に絡み合っていることなどを説明され、児童虐待の発生予防に

向けた「地域で見守る子育て支援システム」の意義、名古屋市内での子育て支援に関わる人々が連携するためのネットワーク連絡会など、地域の多様な社会資源による実効的な取り組みが紹介された。講演後には参加者からたくさんの質問やコメントがあり、児童虐待をなくすために、地域にある様々な社会資源が連携していくことの重要性が確認されたセミナーとなった。

3) 参加者アンケート結果

参加者55名のうち、50名から回答があった（回収率90.9%）。参加者は保育士や幼稚園教諭（38.0%）、看護師（14.0%）、保健師（12.0%）の順で多かった。講演内容が「わかりやすかった」と答えた人は98.0%、「今後の仕事に生かすことができる」と答えた人は96.0%であり、参加者の反応は大変良かった。以下に参加者の感想の一部を掲載する。

- ・今年度より保健師として働き始めており、何も知らない状況だったので、母子保健や児童虐待の基本的なところについて学ぶことができた。
- ・支援事業に関わりながら、いつも深刻なケースにはなかなか届かないことに気がかりがあったが、「すべての子育ての底上げ」が、問題解決につなげられる事が確認でき、意義深く聴かせていただいた。
- ・地域の子育て支援の具体的な方策を考えていく上で良かった。また、色々な方の意見を聞くことができ有効だった。今後活かしていきたい。
- ・知っていることや知らないことなど、様々なことを知った。また保育園以外の機関の意見や考えを知ることができてよかった。
- ・アットホームな雰囲気が、今勤める園の特色とと思っているので、顔の見える関係やホッと出来る場として、引き続き、子育て支援の場をつくっていきたい。
- ・周産期医療機関に働く者としては、スクリーニング項目は参考になった。また妊娠出産のはじめに関わる者として、退院後どんな事業につなげるか参考になった。



- ・今年度、南区では、支援センターが連携を取り、他の地域で主任児童委員さんと協力して取り組みは始めている。今後もすすめていきたいと考えている。
- ・保護者に対して、強みに焦点を当てた支援をこころがけていきたいと思ったが、保護者とのコミュニケーションの難しさも感じている。マイナスに目がいかちなので、良い所を見つけるよう、見方を変えていきたい。

4) 課 題

セミナーは、保健医療福祉関連職種の方々や市民の皆様と連携して取り組むべき社会的な課題をテーマとし、その分野で活躍されている方の講演で、さまざまな立場の人々が一緒に考えることで、解決の糸口や新たな方策の発見につながることを期待して開催している。参加者が少ない現状にあり、開催案内を参加していただきたい方に周知し、多くの方の参加を促すことが課題と言える。これからも社会が求めているテーマを企画し、回を重ねていく中でこの課題を解決していくことが望まれる。

4. 看護研究サポート

担当：安東由佳子、山田礼子

「看護研究サポート」は、看護職者が個人またはグループで行う看護研究に対して、看護学部の教員がそのプロセスや研究成果の発表を支援することを目的としている。臨床の場にフィードバックできる、科学的根拠に基づいた看護研究の推進を通して、よりよい看護の提供に貢献することを目指している事業である。

1) 事業実施の経緯

【平成25年度 後期開始 看護研究サポート】

時期	内 容
10月	看護研究サポート実績報告書の提出依頼 (10/7)

【平成26年度 前期開始 看護研究サポート】

時期	内 容
5月	研究チームの募集開始（案内の発送およびセンターホームページへの掲載）(5/2)
	研究チームの募集締め切り (5/23)
	サポート教員の募集開始 (5/27)
6月	サポート教員の募集締め切り (6/3)
	委員から教員への個別依頼（教員からの応募がなかったため）(6/4)
	研究サポート開始 (6/9)
9月	サポート状況の途中経過把握
3月	看護研究サポート実績報告書の提出依頼

【平成26年度 後期開始 看護研究サポート】

時期	内 容
10月	研究チームの募集開始 (10/14) (「看護研究『い』『ろ』『は』『』」の終了後に、受講生へご案内のアナウンスおよびセンターホームページへの掲載)
11月	研究チームの募集締め切り (11/4)
	サポート教員の募集開始 (11/5)
	サポート教員の募集締め切り (11/11)
	教員からの応募がなかったテーマは、教員へ個別依頼
	研究サポート開始 (11/18)
3月	サポート状況の途中経過把握

2) 事業の実施状況

今年度サポートした研究は、全部で7件であった(平成25年度後期開始; 3件、平成26年度前期開始; 新規1件、継続1件、平成26年度後期開始; 新規2件)。平成26年度に応募したチーム全てを対象とすることができた。7件中、名古屋市立大学病院所属が3件であり、4件が外部の病院であった。研究テーマは、クリティカルケア領域が3件、母性領域、慢性領域、基礎領域、小児領域が各々1件であり、専門領域あるいはテーマを指導可能な教員がサポートを担当した。

研究サポート内容は、研究計画書や質問紙の作成、倫理審査提出のための準備、データ分析方法、学会発表のための研究結果のまとめ方などが中心であった。「平成25年度 後期開始」の研究チーム3件中1件が院内での発表を行うことができた。また、外部病院の1件については、教員との連絡が滞りがちであり、最終的な実績報告書の提出もないまま、サポート期間終了となった。「平成26年度 前期開始」の2件中1件は解析まで終了し、年度末の院内看護研究発表に向けて、現在、抄録準備中である。

費用については、昨年と同様、受講料として1万円を徴収した。

また、ここ数年、研究サポートの希望が少なくなっている。これは、他大学でも研究サポート事業に取り組んでいること、修士修了以上のスタッフが増え、院内でも研究サポートが可能になっていることなどが考えられる。

3) 参加者アンケート結果

研究チームおよびサポート教員の実績報告書からは、どのチームもトラブルなく、無事にサポート出来たことが伺われた。研究チームからの改善・要望の申し出はなく、サポート教員からは、例年と同じく「研究チームからの連絡が長期間途絶える」という意見があった。以下

に研究チームからのアンケート結果を一部掲載する。

- ・計画の段階から十分な相談にのっていただいた。進め方には、私どもの自主性を尊重していただき、自分たちで答えを導き出せるよう見守ってくださったので、達成感を感じることができた。
- ・研究をするにあたり、自分の考えが足りず、浅いことがよくわかった。今後も研究を続けられるように努力していきたいと思う。

4) 課 題

研究チームの応募数を確保できるよう、応募チラシの配布先拡大などを検討していく必要がある。

III 今後の課題

本年度の看護実践研究センターの事業実績を概観して、それらの成果を総括するとともに、本センターの新たな課題を述べる。

1. 社会貢献事業の成果と課題

本年度のセミナーや講演会の実施件数、参加者数は、ともに昨年度実績を上回り、参加者アンケートの結果も、すべての事業において肯定的な評価を得ることができた。これらの理由の一つは「なごや看護生涯学習セミナー」の実施テーマの増加と充実である。看護研究セミナーにおいては、昨年度までの実績と参加者アンケートの結果を考慮して、SPSSによる統計分析を中心とするセミナーを実施した。また、看護実践セミナーにおいては、初めて医療安全をテーマとするセミナーを実施した。常に緊張を強いられる臨床現場では安全な医療・看護の提供が基本であり、自分の看護のレベル・アップのために参加した看護師が多かった。また、昨年度、演習を多く取り入れて好評であった患者急変対応セミナーを本年度も実施したところ、募集人数以上の応募があり、受講者の決定に抽選を必要とした。今回は、大学病院看護部の4名の認定看護師が講師を務め、実習室の備品を使用してシナリオに基づくシミュレーション教育を行った。看護研究セミナーも看護実践セミナーも、臨床看護師のニーズに合致したテーマと方法であったと評価できる。

もう一つの理由は、市民と保健医療福祉関連職種、双方の関心の高いテーマを選んだことだと考える。「なごや看護生涯学習公開講演会」の認知症、「地域連携セミナー」の児童虐待、いずれも現代社会の大きな問題であるとともに、身近な問題でもある。今回はそれぞれのテーマに相応しい外部講師を招聘し、現実に即した講演となった。講演後は、講師と参加者間での意見交換もできた。参加者が自分の問題であると感じ、その問題解決のため

の糸口を発見できるようなテーマと内容であったと評価できる。

また、セミナーや講演会の参加者アンケートの結果では、開催日時と受講料に対する意見が目立った。まず、開催日時について「なごや看護生涯学習セミナー」は、平日18時30分～20時30分と土曜日9時30分～16時30分の2つのパターンで実施している。いずれのパターンに対しても反対の意見が出るため、セミナーの内容と学修効果を考えて設定するしかないだろう。受講料に対しては、「適切」または「安い」という意見が多かった。特に演習を取り入れる場合は、演習の補助者が必要である。これまではセミナーの開催時間を基準として受講料を設定していたが、今後は、セミナーの実施方法も加味して受講料を設定したい。なお、本センターの本年度の事業収支は、若干であるが、収入よりも支出が多くなると見込まれる。事業収支もふまえて、受講料を検討する必要がある。

一方、看護研究サポートは、例年と同様に、教員との連絡が途絶える研究チームはあったが、アンケート結果からは、サポート自体は充実していたと言える。懸念は、研究サポートへの応募者の減少である。これまでは、研究の基礎的知識のある者を対象とするため、募集の範囲を本センターが実施する看護研究セミナー受講者に限定していた。しかし、研究の基礎的知識を学ぶ機会は多く、研究方法をわかりやすく解説している書籍も出版されている。そのため、研究サポートの応募条件を見直し、募集方法を検討する必要がある。

2. 看護実践研究センターの新たな課題

最初に述べたように『名古屋市立大学憲章』および『名市大未来プラン』において、社会貢献の推進が謳われている。特に『名市大未来プラン』には、未来像と課題、進め方が示されており、そこから本センターの新たな課題とすべき主な事項を抜粋した。

最も大きな課題は、「看護実践研究センターを中心とする学際的研究の推進」である。大学の社会貢献活動の源は研究や教育の成果であり、それを広く社会に発信することが社会貢献となる。看護学部は、他の部局に比べて産学官共同研究が少なく、現時点では、人々の生活や健康に寄与する学際的な共同研究を推進することは難しい。したがって、未来像を実現させるためには、学際的研究の経験豊富なセンター専従教員の確保が不可欠である。

また、「全学的な社会貢献の推進」「地域に開かれた大学」については、現在の事業の継続と拡充を図ることで未来像の実現につなげたい。また、その実績を市民の方々に広く認識していただくためには、ホームページの充実

に加えて、広報用のパンフレットやリーフレットを作成したい。

(参考：名市大未来プランより抜粋)

名市大未来プランⅢ 研究 (5)看護実践研究センターを中心とする学際的研究の推進	
未来像	看護実践研究センターが中心となり、人々の生活や健康に寄与する学際的な共同研究を推進します。
課題	<ul style="list-style-type: none"> センター専従の教員を確保することが必要です。 社会連携センターとの協働の方法を検討することが必要です。
名市大未来プランⅣ 社会貢献 (1)全学的な社会貢献の推進	
未来像	社会連携センターを中心に、産学官連携および地域を志向する教育・研究による地域連携を図り、全学的に社会貢献活動を推進します。
課題	<ul style="list-style-type: none"> 全学的に社会貢献を推進するため、社会連携センターと各研究科・学部との連携を一層強化することが必要です。 社会貢献が大学の使命の一つとして求められていることについて、全学的な意識の共有や気運の醸成を図ることが必要です。 本学の社会貢献活動の実績を、市民等に広く認識してもらうことが必要です。
(8)地域に開かれた大学	
未来像	大学施設を市民に開放するほか、幅広い世代の市民に生涯学習機会を提供するなど、「地域に開かれた大学」として社会貢献に努めます。
課題	<ul style="list-style-type: none"> 本学の不動産について、その本来の用途および目的を妨げない限度において、適正かつ効率的な運用を図ることが必要です。 一般市民から専門職業人まで多様な生涯学習のニーズに対応したテーマを設定することが必要です。